



郷土を拓いた人々

～泊湊は、人とモノの交差点～

泊(1)遺跡からは、約5千7百年前の縄文時代から人々が暮らしていたことがわかっている。江戸時代の旅行家菅江真澄も泊の磯漁の様子を旅行記に記している。明治時代に入り、泊漁業組合は県内で最初に設立された7つの漁業組合の1つで、初代組合長種市忠七氏が、積極的な漁業振興を図り、後に県内有数の漁港として発展していく。広大な海を開拓してきた人々の歴史を振り返る。

【縄文時代から人々の交差点】

円筒下層式土器の縄目を分類すると、大きく津軽と南部、下北に分けることができる。泊(1)遺跡から出土したたくさんの土器には、津軽や南部に多い文様の土器や泊独特の文様の土器も出土していることから、泊地区は、縄文時代から北から南から、人やモノが交わる拠点だったことがわかる。



泊(1)遺跡に多い
単軸絡条体

【江戸時代の名産品は？】

『南部史要』延享元年(1744)の「領内産物」にかかわる部分では、南部藩北部地域による重要水産物が、次のように挙げられている。



アワビ漁 昭和40年代

「鮑 七戸泊湊を上品とす。白魚 七戸平沼より出ず。」

【風待ち湊？】

泊漁港は、江戸時代から東風や東南の風が吹けば、利用が困難で「ヤマセが吹けば船を出せない」という悪条件を背負った港だった。



風待ちの漁師

【上北郡下では、最初の泊漁業組合】

泊漁業組合規約は、海産物の改良増進検査・品質格付けなど、不良乾製品(質
や製品
の悪い
干物など)からの脱却を呼びかけていて、組合が打ち出した積極策だったことがわかる。初代組合長は種市忠七氏である。

【明治期のカツオ漁】

明治時代中期、カツオ釣り漁業の拠点は、鮫・湊・泊・白糠があったが、漁船が小型で沿岸に出漁できないことで、漁獲量は少なかった。そこで、県は、明治37年(1907)試験船を導入。泊を拠点に、青森県の沿岸漁業の

普及を試みた。泊においても意欲的に挑戦する漁民が出てきた。

【大正期のカツオ漁】

カツオ釣り漁業の課題は、漁船が小型で沿岸
カツオ漁漁船 焼山湾 大正14年(1925)



に出漁できないことと、餌料の供給に不備な点があったことである。大正7年(1918)県は漁船建造補助費1,200円を予算計上し、改良漁船の一層の普及を図る。泊ではこの制度を利用し漁船を取得するものが出てきた。その後カツオが不漁となりイカ漁が盛んになる。

【明治・大正期のイカ漁】

明治中期から、イカを追って日本海を北上してきた佐渡の漁民集団があった。川崎船のことで、「まわり」「まわりぶね」、川崎衆と呼ばれていた。明治25年(1892)から4年間、青森県は、新潟県佐渡から熟練者4名を招へいし「柔魚釣り漁業の技術改良普及」に努めた。明治28年(1895)11月13日 種市組合長が、青森県知事佐和正氏あてに感謝の意を表明して感謝状を贈っている。新しい技術の導入は、いつの時代もすんなりと行かないものである。



【昭和期のイカ漁】

鮮魚市場を持たない泊漁村。空き地という空き地に縄かけのイカが下がり、スルメづくりに明け暮れる生活であった。昭和の時代に入っても、時化ると風待ちしている漁師たちの姿と時化でも八戸の漁船が泊沖に来て漁をしている様子が見られた。

【漁場拡大と八戸船団】

昭和44年(1969)1月15日、「泊船団いか釣り協議会」を組織。六ヶ所泊港に在籍する20トン以上の漁船群が八戸を根拠地にして、北は北海道の稚内、留萌港から、南は九州博多港辺りまで移動回港しながらイカ釣りの漁場を拡大操業していた。

【県内を代表する漁港へ】

泊漁港は漁場に近く魚が豊富にとれたが、昔は砂浜の漁港だったので、波が高いと船を出せずにいた。船も大型化した1975(昭和50)年頃から焼山漁港に移動し、国・県・漁協が、1998(平成10)年頃から防波堤や護岸を整備し、船揚場や新荷捌施設、製氷・貯氷施設や道路も整備し、新鮮な魚をより早く出荷できるようになった。おかげで高潮の被害も減り、安心して暮らせるようになった。しかし、現在



焼山漁港



泊地区漁港の歴史年表

西 暦	年号	主 な 出 来 事	
1744	延享元年	・「鮑（アワビ） 七戸泊湊を上品とす。」 『南部史要』より	 アワビ漁と磯漁
1756	宝暦6年	・「魚粕の原料魚のイワシ漁が始まる」 『七右衛門文書』より	
1770	明和7年	・「泊港は、東風や東南の風が吹けば、利用が困難で、ヤマセが吹けば船を出せない、という悪条件を背負った港だった。」 『日本汐路の記』より	
1833	天保4年	・「泊スルメイカ漁が開始された」 『八戸市史資料編』より	
1892	明治25年	・泊漁業組合が設立。上北郡下で最初に組織され、県内には7漁業組合があった。	
1895	明治28年	・県主催の「イカ釣り技術伝習」が六ヶ所村で行われた。泊漁業組合頭取種市忠七は、青森県知事佐和正殿あてに、イカ釣りの経緯を詳しく記述して、感謝状を贈る。	
1932	昭和7年	・漁港や船溜施設の整備が取り上げられ、泊港は3万円の国の事業補助が付く。	
1936	昭和11年	・カツオ一本釣りに代ってイワシ流網漁業やマグロ延縄漁、イカ釣り漁業が行われる。	
1938	昭和13年	・泊に初めて発電機が導入される。 	
1949	昭和24年	・漁業会は解散消滅し、泊漁業協同組合が誕生。組合長は種市忠七、組合員正492人 ・青森県の単独事業による泊漁港整備計画に基づく工事が始まる。2年間。	
1950	昭和25年	・イカ釣り船に発電機が導入され、500wの白熱灯が4個付けられる。 ・ヤマデの両腕の釣り針の数を増やして釣り上げる「ツカミバリ」が普及。	
1951	昭和26年	・泊港が第1種漁港に指定。	
1958	昭和33年	・「ドラム巻き式」の漁具が開発され、個人の釣りの技能差がなくなる。	
1959	昭和34年	・国の新農山漁村建設総合対策により「冷蔵庫」を建設。総工費215万円。	
1960	昭和35年	・「生イカ販売」を共販事業とし、スルメ製品のダンボール箱詰め出荷を開始。	
1963	昭和38年	・第二次修築工事完了。第三次修築事業を8カ年の予定で進める	
1965	昭和40年	・強風、高潮来襲。漁船の流失・損壊60隻、住家の全壊51棟、家屋浸水164戸、重軽傷者21人、約19億円を超える大被害を受ける。	
1966	昭和41年	・青森県に泊漁港を第4種漁港（避難港）としての整備を求める「陳情書」を提出。	
1967	昭和42年	・泊漁港南側の防波堤（護岸工事）680mが完成し、さらに南方へ650m延伸築造。 ・焼山地区に「鮮魚荷捌所」を設置。短波漁業無線局を開局。給油所の完成。	
1968	昭和43年	・泊に「全自動イカ釣り機」が登場。労働力不足を補い、漁業操業形態が一変。	
1969	昭和44年	・「泊船団いか釣り協議会」を組織。北海道から九州博多港まで、移動回港しながらイカ釣りの漁場を拡大操業する。 ・焼山と泊漁港が第4種漁港（避難港）に指定。	
1973	昭和48年	・製品スルメを終了し生スルメイカを販売。家族総出のスルメづくり風景も消えた。	
1980	昭和55年	・地区内の漁獲物を一元的に集荷する。	
1981	昭和56年	・アワビ種苗供給センター完成。	
1982	昭和57年	・泊地区漁民研修センター完成。	新荷捌施設・漁協
2002 ～ 2016	平成14年 ～ 平成28年	・青森県は、水産流通基盤整備事業を焼山漁港・泊漁港で実施。焼山漁港では、沖防波堤新設、護岸・岸壁新設、船揚場、新荷捌（にさばき）施設新設、製氷・貯水施設完成、焼山大橋新設。泊漁港では、沖防波堤を新設。	



六ヶ所村立郷土館 企画展
郷土を拓いた人々
～泊湊は、人とモノの交差点～

1 フノリカキ:磯に付着している「フノリ」を採るときに使う道具。



2 テングサトリ:ところてんをつくる材料の天草を採る道具。



3 アワビヤス:丸木舟から箱メガネで海底のアワビを見て突いてとる道具。アワビは3本ヤス。



4 アワビタモ:ヤスで突いてとったアワビを入れた道具。



5 アワビカギ:岩場のアワビをひっかけてとる道具。



6 ウニヤス:ウニを突いてとる道具。ウニは4本ヤス。



7 ウニタモ:ヤスで突いたウニを入れた道具。



8 ウニ樽:カゼ(ウニ)の身を入れた桧木製の樽。乾燥した昆布を敷き、塩ウニを入れ、蓋をして密封した。



9 コシヤズカリ:腰に結び付け、とったアワビやウニを入れる道具。



10 タコバケ:針が4本ついたタコ針で、箱メガネで水中をのぞいて引っ掛けてとる道具。



11 マスバケ:マス(鱒)を釣る道具。1月から3月までの、引き縄の一本釣り。



12 エサマキ:カツオ釣りのエサ(イワシ)をまく道具。大正時代。



13 メフントリ:カツオの中骨に沿って付いている血腸(腎臓:メフン)を取る道具。塩辛にする。



14 包丁:カツオをさばくときに使った包丁。



15 箱メガネ:海の中をのぞいた道具。ガラスといった。明治20年(1887)代から使用。



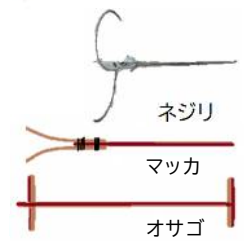
16 アカトリ:船にたまった海水(アカ)や雨の後の雨水を汲んで船外に捨てる道具。



17 ネジリガマ:先の鎌で刈り、ワカメをからみつけてとる道具。



18 ネジリ:コンブを引っかけてとる道具。同じ道具に、マッカ、オサゴがある。



19 カメノコイシ:網のバランスを保つためのオモリ(沈子)。石を固定するため、麻ひもで丹念に包むように編んでいる。新納屋遺跡からは、約9千年前の石の錘(石錘)が出土している。



石錘(せきすい)

20 セトアシ:網の下につけて、網を沈めるための陶器製のオモリ(アシ:沈子)。コンクリート製もあった。石が古来より用いられていたが、鉄、さらに鉛や陶器製に変わってきた。



21 アバ:網を浮かせるための浮(アバ)。桐や杉材でつくった。



網を設置する時は、アバ(浮子)とアシ(錘:沈子)で調節する。その後、ガラス球から合成樹脂のものが出た。



ガラス球

22 アバリ:網を修理する時の網針(アバリ)。



23 アバリイレ:網針(アバリ)を入れる麻袋。網は、蛙又結びで編む。



24 ガワ:麻糸を巻き付けて置く道具。大正時代に綿糸から麻糸となり、昭和30年ころからナイロン製になった。



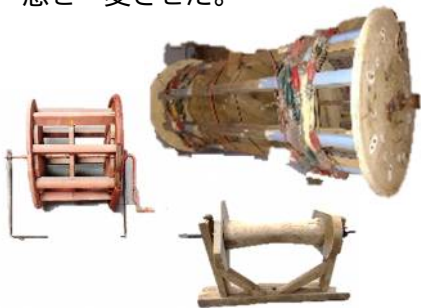
25 3本ヤマデ:昔は、浅い所のイカはヤマデで釣った。これは深い所のイカを釣るための道具。浅利式で、1953年から使用。後にドラム式となる。



26 イカ釣り船。青東丸模型。パラシュートアンカーを海の中に沈めることによって船の先端を誘導し、波の流れで船の転覆を防ぎ、魚の流れに沿って船を動かし漁をおこなう。昭和40年代までは19トン未満の動力漁船で、昭和42年に7隻の30トン以上の大型漁船が出現。八戸港の他に全国の漁港を拠点に操業の近代化も進められた。



27 ドラム式イカ釣り漁具:昭和33年(1958年)頃、開発され個人差がなくなる。船には14, 5人乗りこんでいた。その後、昭和43年(1968)、泊に全自動イカ釣り機が登場し労働者不足を補い、漁業操業形態を一変させた。



撮影者：目代健三氏

28 ハネゴ:海面のイカを針で引っかけて釣る道具。上手な人は、2本のハネゴを使った。



29 竹籠:魚などを入れて運ぶ竹製籠。昔は、山から竹をとってきて、各家々で編んだ。漁の後、各家への分け前を籠で量った。



30 モッコ:魚などを入れて運ぶ杉材製の背負い箱。北海道や泊での呼称。昔は桧木製のショイ桶で、主に女性の仕事だった。



ショイ桶 大正時代

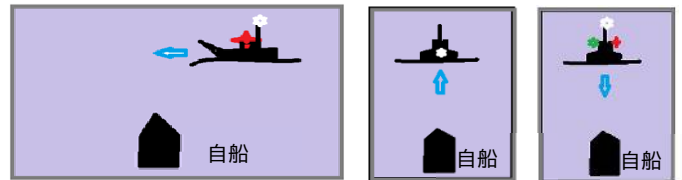


泊浜の様子 大正時代

31 ガス灯:炭化カルシウムと水を反応させ、発生したアセチレンガスを燃焼させるランプ。昭和初期まで、船内に棒を立て、つるして手元を明るくして使われた。



32 航海灯:海上衝突予防法による船舶に設置される灯火のこと。色・位置・明るさなどは世界共通で、左が赤、右が緑という灯火の色は航空機も同じ。赤色灯が見えたら右に回避。



航海灯の見え方

33 泊の丸木舟:ブナやカツラの樹齢160年~170年位の大木をくり抜いた完全な一本作りで、海で使用される丸木舟としては、秋田県男鹿半島の丸木舟と共に、日本に残る最後のもの。主に岩礁の多い海岸での、冬のアワビ漁に使用した。漁師自身が山に入り、大体の形に彫り込む船作り(フナウチ)をし、里に下ろしてきて、最後船大工に仕上げてもらっていた。明治から大正にかけて多く製造された。昭和30年代には、舟用の大木を確保できなくなり、見られなくなった。



※昭和38年「国の重要有形民俗文化財」指定

34 カッコ船(ムダマハギ):丸木舟より軽く波が入らず波に乗りやすく、多少の波でも操業できた。明治以降使われるようになる。船底部にムダマと呼ばれる材を用い、舷側板(棚板)を取り付けている構造で、ハギは、接ぎ合わせ造船するという意味。

始めカツオ漁に、カツオが獲れなくなり大正から昭和にかけては、イカ漁に使われた。カッコ船の後に川崎船が使われた。昭和50年代(1975~)には、小さく一人乗りとなり、磯漁に使われた。細めの車権(クルマガイ)を使っていた。コンブやワカメ漁は大きめの船で、ウニやアワビは小さめの船が使われていた。

